

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	委員コメント
1	農業総合研究センター	ニッチトップを目指した極小輪切り花の栽培技術の開発	H19~21	県では、お盆用のケイトウと正月用の葉ボタンでニッチトップの産地づくりを進めている。折しも、アレンジメントフラワーが普及し、ケイトウや葉ボタンは需要期間が拡大してきているが、これまで以上に花の小さい(極小輪)ものが求められている。そこで、ケイトウはハウス内での根域制限技術、葉ボタンは直播密植栽培技術を確立し、他県の競合産地に先行して高品質生産を行う。	B	・ニッチトップになることが収益性アップや農林全体の収入増につながるという関係がもう一つ明確ではない ・新しい需要開拓にかなり有効であると思われる。将来の販売の拡大に期待したい ・アイディアは面白く実現性も高いと思われるが、波及効果は大きくはない ・生産資材費、人件費、運送費等のコスト低減が課題。
2	農業総合研究センター	特産野菜の周年栽培技術の確立	H19~21	加賀野菜の金時草、能登野菜候補の能登白ねぎを全国に誇れるブランドに育成するため、年間を通し安定した品質と生産量を確保することが重要である。しかし、金時草では夏・冬季の着色不良や能登白ねぎは積雪期の露地生産は困難なため、品質や出荷量が低下するので、それらの原因究明や新たな生産技術を研究し、高品質の周年栽培体系の確立を目指す。	B	・着色不良に対する技術的なアプローチ法を明確にしてほしい ・金時草の研究のロードマップを用意する必要あり ・白ねぎは研究課題としての新規性に乏しい ・金時草の冬場の栽培には問題点が多いのではないかと、栽培方法や試験区を増やした方がよいのではないかと ・その他の加賀野菜も品質向上を目指さないとブランド自体が弱くなる。また、この野菜がお土産となるような加工品の道を想定しながら進めると良い。
3	農業総合研究センター	大豆の生産力向上技術の確立	H19~21	近年、大豆の収量は低下傾向にあり、地力低下が原因かと言われているものの明確ではない。肥料の種類、堆肥や緑肥など投入する有機物の種類、根粒菌の活性などの観点から生育量との関係を解析し、増収要因を明らかにすることにより、大豆の生産力向上を図る栽培技術を確立する。	B	・仮説を明確にして、それに沿って研究を進める必要があると思う ・研究開発の必要性が見られない ・生産量の目標設定が高いのではないかと ・石川県がなくてはならないのかと思うが、106kg/10a、200kg/10aは緊急性があり期待は大きい ・品種選定やブラソイラーなど耕種的方法も行ってはどうか
4	農業総合研究センター	能登特産力ボチャの省力・安定生産技術の確立	H19~21	能登における野菜の主要品目としてカボチャがある。農地開発地で減少している葉タバコ栽培のあと地利用は緊急の課題であり、高うね小苗・植穴栽培など葉タバコ栽培のノウハウや機械の活用、また、地元・県内からの地産地消ニーズ(冬至カボチャ、菓子原料)に応えるための作型の確立や品種の選定を研究し、特産カボチャの拡大に向けた省力・安定生産技術を確立する。	B	・たばこ栽培の技術を使ってカボチャ栽培を行う発想は面白い。波及効果も期待される ・収穫時期による栽培に適した品種、時代のニーズにあった品種の選定をしてほしい ・能登の生産者をバックアップする必要性は感じる。経済効果以上に農地の利用度がアップして荒廃を防ぐ役割がある ・栽培方法としてはユニークだが、収穫率、優品率が課題
5	畜産総合センター	飼料作物によるワルナスビ(外来雑草)の耕種防除法に関する研究	H19~22	県内牧草地に斑点(スポット)状に繁茂している外来雑草のワルナスビは、牧草収量と嗜好性を低下させ、薬剤による防除法もないことから、畜産農家の被害は大きい。このため、ワルナスビの生育を抑制する牧草を選定して被害草地へスポット播種する耕種防除法を確立する。	C	・計画が詰まっていない。基礎試験から始めるべき ・これは対策と捉えた方が良く、研究としてあえて位置づける必要は低い。但しそれはニーズがないと言うことではない ・物理的など、他の防除法の方が有効に見える ・具体的な県民、業界のニーズに結びつかないのではないかと、県が関与する公共性もさほど無いように感じられる。 ・具体的な試験設計を明確にすべき
6	林業試験場	水分傾斜を小さくする能登ヒバ高温乾燥スケジュールの開発	H19~20	能登ヒバ材に対して乾燥温度や乾燥時間の組み合わせが異なる高温乾燥試験を実施し、乾燥後の水分傾斜が小さく、仕上げ後に狂いが生じない、最適な高温乾燥スケジュールを開発する。	B	・正角で使う場合は無節との関連が必要。困難な課題だがチャレンジする必要がある ・重要な課題であるが、もっと多面的な評価法が必要と思われる ・生産者と消費者両方のニーズが期待できる。社会的効果もある ・どのようにして乾燥調整されるかが今後の課題
7	林業試験場	GABA含有量強化を目的としたエノキタケ栽培技術の開発	H19~20	血圧降下や腎肝機能活性に効果があるとされているGABA(γ-アミノ酪酸)の含有量を強化し、安定した収量が得られるエノキタケ栽培法を確立する。	B	・GABA含有量強化エノキタケの有効性を明確に示すと共に、販売価格とコストのバランスも考慮した栽培技術が必要 ・研究成果は期待できるが、実用化は時間がかかる ・発想、着眼点はおもしろい。先行研究で得た商品化ノウハウを保護すべき対策を早急に立てるべき ・含有量1.5倍では消費者は魅力は感じない。但し機能性食品に関する研究は価値がある。他の品目も探すと良い ・どれだけのニーズがあるか、市場調査が必要ではないか
8	水産総合センター	安全なカキの生産体制の確保に関する研究	H19~22	安全なカキの生産体制の確保を図るため、養殖マガキと天然イワガキのノロウイルスの出現傾向を時空間的に明らかにする他、これまでの浄化処理方法を改善する。	B	・研究期間が長すぎるので、途中で成果をアウトプットすることが望ましい ・日本有数のカキの生産地として、安全安心なカキを出荷することは不可欠であり早期の成果が求められ、活用が待たれる ・この研究内容では問題の解決は難しい。県としての総合的な対策が望まれる ・ノロウイルスによるカキの食中毒問題は、県内のカキ生産者にとっては致命的であり、本研究は水産業界、消費者のニーズに即応したテーマである。また、公共性も極めて高いと思われる。 ・本研究の成果がいずれはノロウイルスの根源(下水道排水)までさかのぼり、その抜本的対策にまで波及することを期待したい。 ・しかし100%安全と宣言できるようでなければ飲食業では使えない。この研究は基礎研究とはなるだろうが実用化としての効果は感じられず残念。何とか生かぎを安全に食べられるようにして欲しいという期待は大きい ・安全な生ガキの供給は重要であるが対策が不十分であり検討が必要
9	水産総合センター	貝類資源の増殖に適した底質環境の改善に関する研究	H19~21	七尾湾の貝類資源(アカガイ・トリガイ)の増殖に適した底質環境の改善方法を研究する。	B	・事業化の可能性調査をすべき。事業の設計までしないと事業化は難しい ・この課題は研究としてよりも県の事業として取り組むべき段階に来ているのではないかと ・漁場環境の問題は一漁業者、水産団体では取り組めない極めて大きなテーマ。その意味で県等の公共研究機関が関わる公共性は強い ・テーマが大きく、困難であるだけに、費用対効果を事業化レベルまで求めることは無理かと ・是非最盛期に回復させて欲しい。目標の金額を明確(力の入り方が違う)にしてがんばって欲しい ・長期的なビジョンプランが必要。今後の対策に期待